

読者の広場

critical な review と critical のつかない evaluation

法政大学 中嶋龍三

前の核データニュースNo.26で、私がくだらないことを書いたのが藪をつついて蛇を出す結果となってしまう、しかも全くの偶然であるが、核データニュースの同じ号で百田先生から名指して表題のことについて意見を求められた。“evaluationがcriticalでなくてよいなどということは全く考えられない……測定されたデータのevaluationには実験屋の経験が生かされねばならない”という百田先生の御意見には同感である。しかし、御意見ごもっともでは折角の火種に水をかけるようなものだから、油を注ぐ結果にならないことを念じつつ、私の考えを述べてみたい。

百田先生はcriticalの意味を辞書で調べられたそうだが、私はまずevaluationというのを手許の辞書で見てみた。動詞のevaluateで引くと“1.(綿密に)価値を検討する。評価する。鑑定する。2.【数学】…の数値を求める。数的に表現する。”とある。この1の意味は明らかにcriticalであり、2の意味はかならずしもcriticalでなくてもよい、と考えてよからう。

そもそも核物理の分野で行なわれたcritical reviewは、あくまでも実験データに基づいている。もちろんそれを行なうためには理論的考察も必要なことはいうまでもないが、しかし理論計算だけによってデータを創造するということにはなかった。だからevaluationといえ、たとえ1つの測定しかない場合といえども、必ずcriticalがついたものであって、そのcritiqueにもとづいてjudgeすることが要求されるのである。したがってevaluationの処方や過程に、ときにはその結果にもevaluatorの個性が滲み出ていることが屢々あるが、それは論旨が明快であるかぎり当然容認されるべきであろう。私はむしろそのような個性的なevaluationを高く評価したい。だから、百田先生が追憶されているHavensの独白もむべなるかなという気がするのである。

ところでこのようなcriticalのついたevaluationを行なうときには、まず原論文を精査し、場合によってはなんらかの手段で原著者と対話することが必要になる。原論文に立返って、実験装置や測定条件など客観的情報以外に、通常そこに記述されている筈の問題の背景、著者の工夫や配慮、あるいは議論や主張などを調べてみると、それらはcriticalのついたevaluationにとって意外に役立つものである。とりわけ、百田先生のいわれる“実験屋の経験”をもちあわせない私のような者にとっては非常に有用である。(しかし、度が過ぎると原著者の我田引水の主観に惑わされる危険性がある、と注意してくれた人もいる。)なお、同じ著者が発表している別の対象に

関する論文があれば、それらを詳しく検討することも原著者との対話法の1つであって、その著者の実験上の癖を知るうえで大切なことだ、ということも付言しておきたい。(ただし、著者をその方面の測定の権威者であると錯覚しないように、と注意されたこともある。)

わかりきったことをくどくどと書き過ぎたようだが、とに角criticalのついたevaluationを行なう際の最小限の必要条件は原典主義にたつことであって、その検討結果がその後続く評価過程にどう反映されるかということは、むしろ個々のevaluatorの力量の問題であろう。もちろんその評価過程にも、荷重平均とか最小自乗法などを適用する際にcritiqueを必要とすることは多々あろうが、それらのいくつかの問題点についてはかつて日本原子力学会誌(vol. 23, No 7 (1981) 231*)に書いたのを、それを読んでいただきたい。

表題は“……criticalのつかないevaluation”となっているのだが、少なくとも測定データに関するかぎりcriticalのつかないevaluationはあり得ない筈だ、というのが私の考えである。あり得ない筈なのだが、現実には、critiqueのなされていないevaluated dataが大ぴらに罷り通る危険性があるように思えてならない。いくつかの場合が考えられるがその中の1つは、待ち望んでいた測定が初めてこの世に現われたときにすぐ(無批判に)それを採択することである(実験屋の経験のない私は、以前このことでえらい失敗をしでかした経験がある)。

最後にもう一言、私の危惧を述べておきたい。それは、最近のように国際的なデータ・センターで権威のある(?)データ収集が行なわれ且つそれが容易に利用できるようになると、センターのコンピューターに収納されている情報だけでつねにevaluationが行なえる、と盲言するevaluatorsが現われてきたことである。だからといってcriticalのつかないevaluationが行なわれているというのではないが、うっかりすると、披露宴における仲人の(あらかじめ提供された差し障りのない資料にもとづいた)新郎新婦紹介と同じようなものになりかねない。ご用心、ご用心!

* ページの231は正確には465であるが、学会誌では筆頭ページのみ231と何故か間違っている。両方の数字を知らないと探すときまごつく。(編集係)